

P-85 神経性食思不振症の骨塩量
—骨密度に影響を与える因子について—

大阪警察病院

甲村弘子、荻田和秀、大塚志郎、
有本洋子、高山克巳

〔目的〕神経性食思不振症(以下本症)では骨量が減少し将来の骨粗鬆症のリスクファクターとなることが知られている。しかしながら骨量減少に関与する因子、病状の変化による骨量の変動についてはほとんど知られていない。本研究ではこれらの点を明らかにしようとした。

〔方法〕続発無月経を主訴として来院し本症と診断された21例(14-26歳、平均18.9歳)を対象とした。本症の診断は厚生省特定疾患神経性食思不振症調査研究班の診断基準によった。骨密度はDEXA法を用いて第2-第4腰椎正面を測定した。①身長、体重、BMI、血中 E_2 値、発症年齢、罹病期間、無月経の期間、BMI<16であった期間と骨密度との関連について検討した。②さらにこのうち10例について経時的に(4-14ヶ月)骨密度の推移を調べた。体重が回復せず無月経のままの群(A群、6例)、病状が回復し月経が再開した群(B群、4例)にわけた。

〔成績〕①本症の骨密度は $0.889 \pm 0.087 \text{ g/cm}^2$ (対照の87.2%)に低下していた。②骨密度測定時の身長、体重、BMI、血中 E_2 値と骨密度の間には関連がなかった。罹病期間($p < 0.01$)、無月経の期間($p < 0.05$)、BMI<16であった期間($p < 0.01$)が長くなるほど骨密度は有意に低下していた。③骨密度の経時的変化を測定するとA群では全例低下しており年間変化率の平均は-4.67%であった。一方B群では+2.1%増加していた。

〔結論〕①罹病期間、無月経の期間ならびに体重減少の期間が骨密度の低下に大きく影響していること②体重および月経の回復していない例では骨密度の減少が続くことが明らかになった。本症は骨代謝の面からも思春期における重要な疾患であり、適切な治療の必要性が示唆された。

P-86 プロゲステロン併用投与が脂質代謝
へのエストロゲン効果に及ぼす影響について
—とくに関連酵素活性を中心として—

高知医大

林 和俊、若槻明彦、相良祐輔

〔目的〕estrogen(E)がHDL代謝に与える影響について報告してきた。今回、Eに併用するmedroxyprogesterone acetate(MPA)が、Eの脂質代謝への効果に及ぼす影響について、関連酵素活性を中心に検討した。〔方法〕閉経後；卵巣摘除婦人を対象とし、control(C)群36人、E群29人(結合型E(CEE)0.625mg, 3ヶ月内服)、P1群22人(CEE 0.625mg+MPA2.5mg, 3ヶ月内服)、P2群20人(CEE 0.625mg+MPA5.0mg, 3ヶ月内服)の血中総cholesterol (Ch)、中性脂肪、HDL-Ch、アポAI, AII蛋白濃度、LPL、H-TGL活性を測定した。〔成績〕1), HDL-Ch, アポAI, AIIはC群に比較し、E群でいずれも有意に高値を示したが、MPA投与効果はP1, P2群の順に容量依存的に減少し、P2群ではC群の濃度まで低下した。2), LDL-ChはC群に比較し、E, P1, P2群いずれも有意の低値を示した。3), LPLは4群間で差を認めなかった。H-TGLはC群の $33.44 \pm 16.16 \mu\text{M/hr/ml}$ に比較し、E群で $21.78 \pm 6.42 \mu\text{M/hr/ml}$ と有意な低下を示したが、P1, P2群で各々 23.94 ± 13.34 、 $28.43 \pm 19.94 \mu\text{M/hr/ml}$ とMPAの容量依存的な上昇を示し、P2群ではC群と差を認めなかった。4), H-TGLとHDL-Ch間に有意の負の相関を認め、LDL-Ch間には相関を認めなかった。〔結論〕E群で高値のHDL-Ch, アポAI, AIIは、MPA投与で容量依存的な減少を示す一方、E群で低値のH-TGLは逆に容量依存的な上昇を示すことより、EのH-TGL活性抑制効果をMPAが相殺する可能性が示唆された。H-TGLとHDL-Ch間の負の相関から、HDL-Ch濃度はH-TGLに規定されるものと考えられた。LDL-ChはE, P1, P2各群で低値を示したが、LPLに変動なくH-TGL間と相関がないことより、LDL-Ch濃度へのLPL, H-TGLの関与は少ないことも示された。以上の成績は、ホルモン補充療法(E+MPA)に有用な知見であると考えられる。